七尾市千野古墳群調査報告書

2000

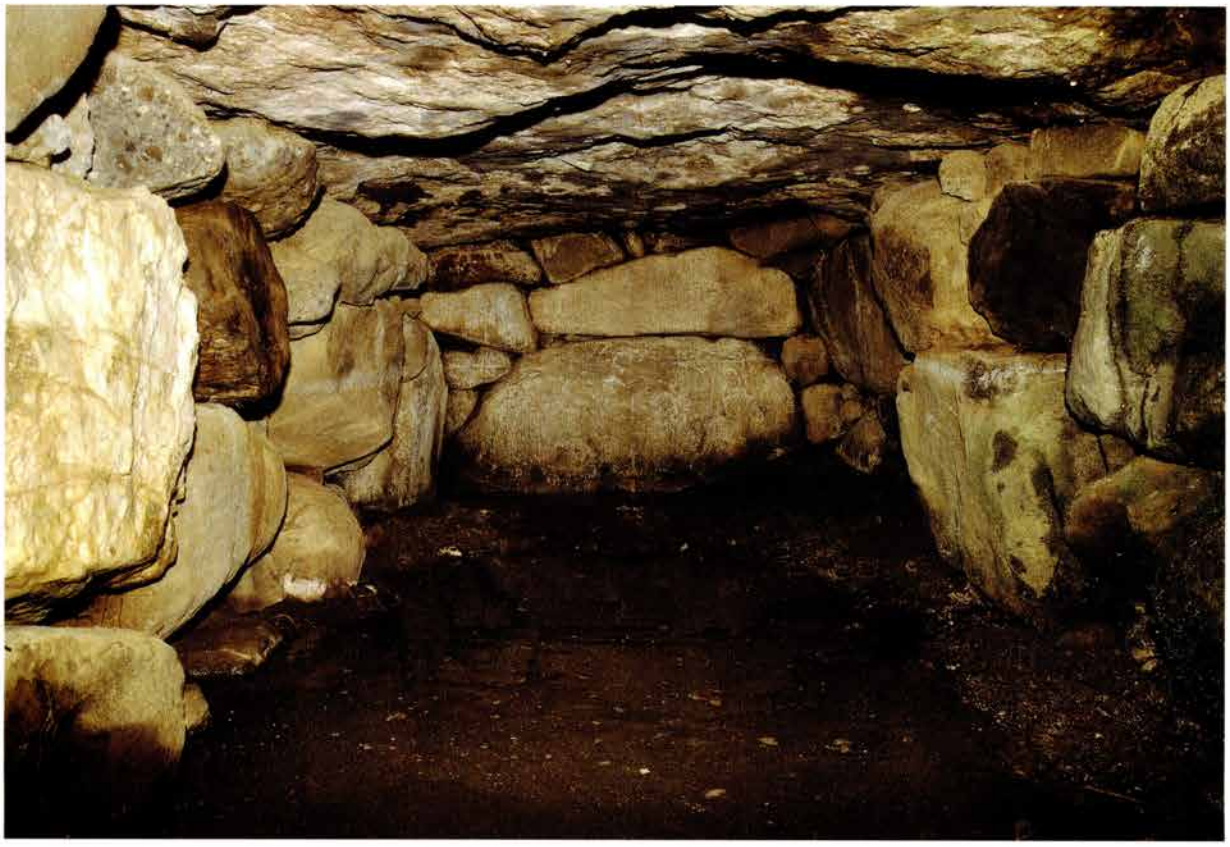
石川県教育委員会

七尾市千野古墳群調査報告書

２０００

石川県教育委員会

1号墳全景



1号墳石室

例　　言

1　本書は石川県七尾市千野町地内に所在する、千野古墳（1号墳・2号墳）の確認調査及び石室測量調査の報告書である。

2　調査は、石川県農林水産部農村環境課所管の、老朽ため池整備事業千野地区に伴う残土処理場所の埋蔵文化財確認調査として、石川県農林水産部長の依頼を受け、石川県教育委員会事務局文化財課が平成10・11年度に実施した。

3　現地調査には、七尾市教育委員会事務局文化課（浦辺常寿、善端直、網谷行洋、津田耕吉、谷口健太郎）、石川県農林水産部農村環境課、石川県七尾農林総合事務所、千野地区、白山重信氏の協力を得た。

4　本書は、伊藤雅文（石川県教育委員会事務局文化財課埋蔵文化財専門員）、中屋克彦（同主事）

目　　次

第1章　位置と環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第2章　調査の経緯と経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
第3章　千野1号墳
　第1節　墳丘 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
　第2節　石室 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第4章　千野2号墳
　第1節　墳丘 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
　第2節　石室 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
第5章　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

挿　図

図1　位置図 ・・・・・・・・ 1
図2　周辺の遺跡 ・・・・・・・・ 1
図3　千野古墳群全体図 ・・・・・・・・ 4
図4　千野1号墳墳丘図 ・・・・・・・・ 5
図5　千野1号墳石室測量図 ・・・・・・ 7
図6　千野2号墳全体図・土層図 ・・・・・ 8
図7　千野2号墳石室平面図 ・・・・・・ 10

報告書抄録

ふりがな	ななおしちのこふんぐん　ちょうさほうこくしょ
書　　名	七尾市千野古墳群調査報告書
副書名	
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	伊藤雅文　　中屋克彦
編集機関	石川県教育委員会
所在地	〒920-8575　石川県金沢市広坂２丁目１番地１号
発行年月日	2000（平成12）年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
ちのこふんぐん 千野古墳群	いしかわけんななおし 石川県七尾市 ちのまち 千野町	17202	02169	37° 00′ 28″	136° 57′ 48″	19980811～ 19980814 19990901～ 19990922	300	農業関連

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
千野１号墳	古墳	古墳時代 後期	直径約10mの円墳 横穴式石室		
千野２号墳			横穴式石室		墳丘は削平されている

第１章　位置と環境

千野古墳は、七尾市の市街地中心部から約３km南方の千野町地内に位置している。崎山半島へと延びる石動山系の、通称「城山」から派生する舌状丘陵の末端近くに立地しており、付近の標高は50ｍ前後である。現在、古墳からは、北に七尾市街地と七尾湾の一部が遙かに望まれ、西には羽咋市から続く邑知地溝帯とその北側に横たわる眉丈山系を望むことができる。

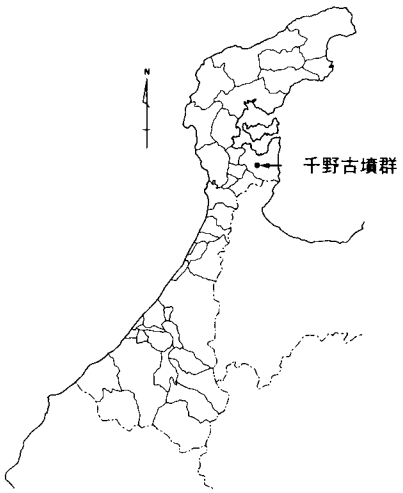


図１　位置図

現在の七尾市街地周辺は、古代には国府、国分寺などが置かれ、港は「香島津(加嶋津)」と呼ばれる国津であったとされている。中でも、国分尼寺の可能性が指摘されている千野廃寺は、千野古墳の北西方約300ｍの至近に位置している。中世には能登守護畠山氏の本拠地として七尾城が築かれ、その城下町が城山の山麓に広がっていたことが、近年の考古学的調査により明らかにされつつある。さらに、近世初頭には前田利家により小丸山城とその城下町が形成され、古くから、能登の政治・経済・文化の中心として発展してきたことが知られる。

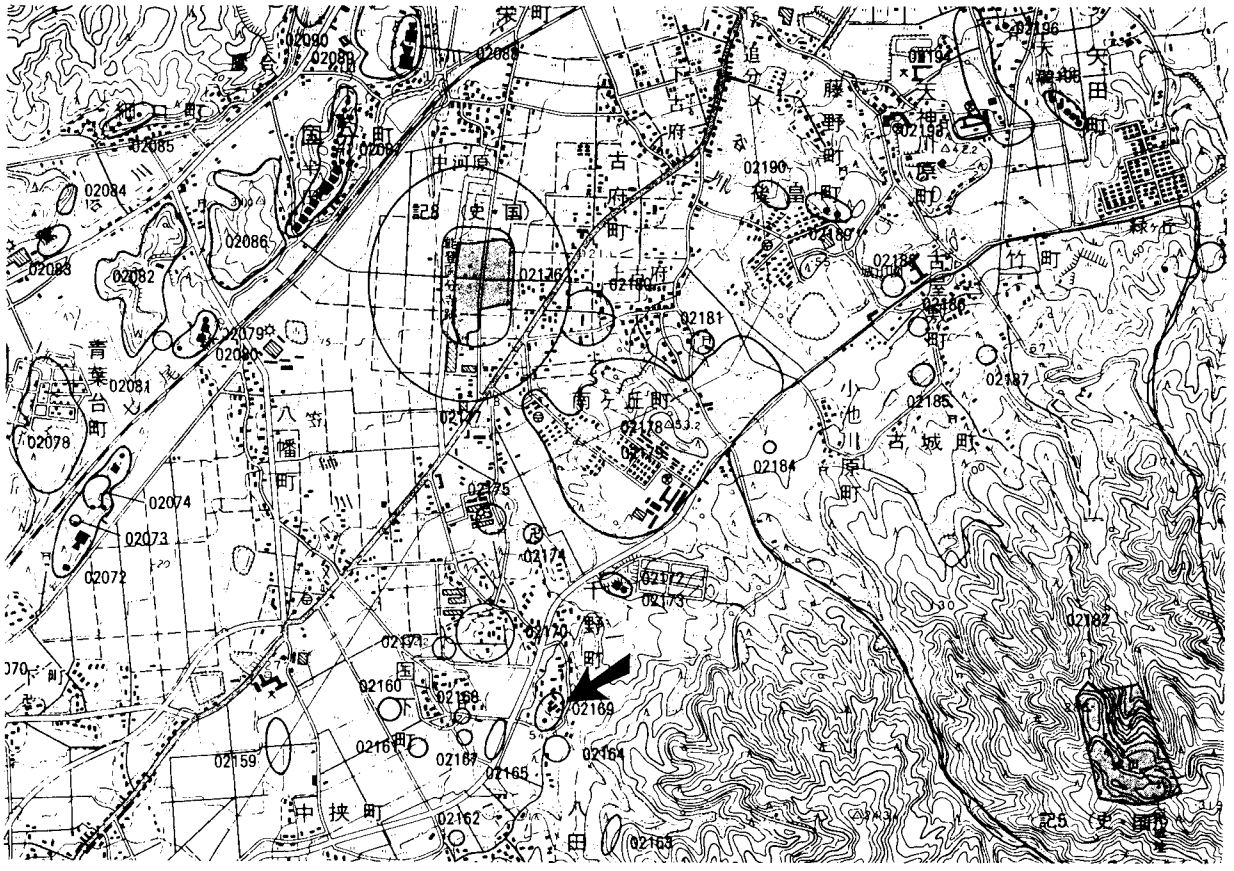


図２　周辺の遺跡

千野古墳が築造された古墳時代においても、前期の国分尼塚古墳や中期の高木森古墳など、それぞれが能登地域の有力豪族のものと考えられている。また、後期に至っては、七尾南湾を中心に、院内勅使塚古墳、三室まどがけ古墳群、須曽蝦夷穴古墳などの横穴式石室を内蔵する古墳が築かれ、横穴式石室の少ない県内にあっては、畿内や他の有力地域との関係を知ることができる拠点的な地域となっている。

遺跡番号	名　称	所　在　地	種　別	立　地	時　代
02072	月夜見神社古墳	七尾市下町	古墳	台地斜面	古墳
02073	下町中世墓遺跡	七尾市下町	墳墓	丘陵斜面	中世
02074	下町横穴群	七尾市下町	横穴墓	丘陵斜面	古墳
02075	白馬古墳	七尾市白馬町	古墳	平地	古墳
02076	白馬商業団地遺跡	七尾市白馬町	散布地	平地	古墳
02077	白馬Ｂ遺跡	七尾市白馬町	散布地	台地	古墳
02078	八幡菅谷遺跡	七尾市細口町、下町、八幡町	集落跡	台地	縄文、古墳～平安
02079	八幡八幡神社古墳群	七尾市八幡町	古墳	丘陵	古墳
02080	八幡経塚	七尾市八幡町	経塚	丘陵端	室町
02081	八幡塔地面遺跡	七尾市八幡町	散布地	台地	不詳
02082	細口源田山遺跡	七尾市細口町、八幡町	墳墓、集落跡	台地	弥生、中世
02083	細口遺跡	七尾市細口町	散布地	平地	古墳
02084	細口Ｂ遺跡	七尾市細口町	散布地	丘陵端	中世
02085	細口古墳群	七尾市細口町	古墳	丘陵尾根	古墳
02086	国分山遺跡	七尾市国分町	散布地	丘陵	弥生、古墳
02087	国分火司神社古墳群	七尾市細口町、国分町、八幡町	古墳	丘陵	古墳
02088	国分尼塚１号墳・２号墳	七尾市国分町	古墳	台地	古墳
02089	国分尼塚遺跡	七尾市国分町	散布地	台地	不詳
02090	国分高井Ａ遺跡	七尾市国分町	散布地	平地	古墳
02159	中挟角田遺跡	七尾市中挟町	散布地	丘陵斜面	古墳
02160	国下遺跡	七尾市国下町	散布地	丘陵斜面	平安、中世
02161	八田樽森遺跡	七尾市八田町	散布地	丘陵斜面	中世
02162	八田大苗代遺跡	七尾市八田町	散布地	平地	不詳
02163	千野横穴群	七尾市千野町	横穴墓	丘陵斜面	古墳
02164	千野Ａ遺跡	七尾市千野町	散布地	平地	不詳
02165	国下柳田遺跡	七尾市国下町	集落跡	丘陵端	平安
02166	国下ムカイバラ遺跡	七尾市国下町	古墳	丘陵斜面	古墳
02167	八田梨ノ本遺跡	七尾市八田町	散布地	丘陵端	縄文
02168	国下縄文遺跡	七尾市国下町	散布地	丘陵端	縄文
02169	千野１号墳・２号墳	七尾市千野町	古墳	丘陵端	古墳

遺跡番号	名　称	所　在　地	種　別	立　地	時　代
02170	千野廃寺	七尾市千野町	寺院跡	台地	奈良
02171	千野大聖寺平遺跡	七尾市千野町	散布地	台地	奈良～中世
02172	千野高塚遺跡	七尾市千野町	集落跡	丘陵	弥生
02173	千野高塚１号墳・２号墳	七尾市千野町	古墳	丘陵	古墳
02174	千野正福寺遺跡	七尾市千野町	散布地	丘陵端	縄文
02175	千野遺跡	七尾市千野町	散布地	丘陵端	古墳
02176	能登国分寺跡付建物群跡	七尾市古府町、国分町	寺院跡	平地	奈良・平安
02177	古府・国分遺跡	七尾市古府町、国分町	散布地	平地	奈良・平安
02178	古府タブノキダ遺跡	七尾市古府町	集落跡	台地	奈良・平安
02179	古府十三塚遺跡	七尾市古府町	塚		中世
02180	古府廃寺	七尾市古府町	寺院跡	丘陵裾	奈良・平安
02181	古府総社遺跡	七尾市古府町	散布地	台地	奈良・平安
02182	七尾城跡	七尾市古城町、古屋敷町	城跡	山陵・丘陵	中世
02183	城山中山遺跡	七尾市古府町	散布地	山腹	縄文
02184	古府谷内遺跡	七尾市古府町	散布地	平地	近世
02185	古城の池遺跡	七尾市古城町	散布地	平地	中世
02186	古屋敷遺跡	七尾市古屋敷町	集落跡	丘陵裾	中世
02187	古城大念寺屋敷遺跡	七尾市古城町	寺院跡	丘陵斜面	中世
02188	古屋敷シッケ遺跡	七尾市古屋敷町	集落跡	平地	近世
02189	後畠東之御塚古墳　後畠西之御塚古墳	七尾市後畠町	古墳	丘陵斜面	古墳
02190	藤野遺跡	七尾市藤野町	集落跡	微高地	弥生、中世
02191	城山旭遺跡	七尾市須能町	散布地	丘陵	縄文
02192	矢田大門遺跡	七尾市矢田町	散布地	平地	縄文
02193	矢田天神川原遺跡	七尾市天神川原町	散布地	丘陵裾	平安、中世
02194	矢田天神川原遺跡	七尾市矢田町	散布地	平地	奈良・平安
02195	矢田中瀬古墳群	七尾市矢田町	古墳	丘陵	古墳
02196	矢田天満宮古墳	七尾市矢田町	古墳	丘陵	古墳

第２章　調査の経緯と経過

今回の試掘及び測量調査は、県農林水産部七尾農林総合事務所（農村環境課所管事業）が計画した、老朽ため池整備事業千野地区（千野の池）に先立つ調査である。

事業は平成９年度に着手されたが、千野古墳と千野の池は、約200ｍ離れた位置にあり、工事用道路の新設もなく、工事により直接墳丘が掘削されるなどの影響があるとは考えられなかった。ところが、工事により搬出される残土の処理場として、古墳周囲の田圃が提供されたとの情報が寄せられ、七尾農林総合事務所へ確認をとったところ、残土により墳丘の裾部が埋め立てられる計画であることが明らかとなった。このため、文化財課と七尾農林総合事務所との間で協議を行い、平成９年度の工事については、残土による盛土を墳丘から３ｍの位置までにとどめ、今後の取り扱いを協議することとなった。

平成10年５月に、文化財課、七尾農林総合事務所、七尾市教育委員会、地権者による現地打合せを行い、主に以下の事項を確認した。

①墳丘裾が地境であること

②新たに盛土造成する田圃の法面を墳丘裾から立ち上げること

③１号墳石室見学のための進入路を確保すること

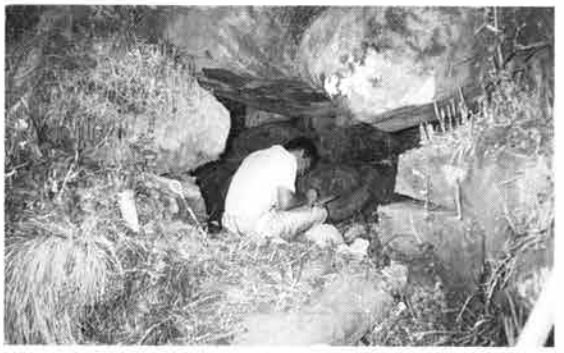
④盛土されてしまう田圃部分の試掘調査を実施すること

また、この時、地権者から２号墳の石室用材と見られる大きな石材が、田圃に埋まっているとの情報を得た。２号墳については正確にその位置が確認されていなかったことから、試掘調査は１号墳の墳丘規模の確認とともに、２号墳の位置についても明らかにすることを目的として実施することとなった。

２号墳調査風景

試掘調査は七尾市教育委員会の協力を得、平成10年８月11日～14日までの計画で着手したが、12日夜からの大雨により、14日午後まで作業は中断を余儀なくされ、旧盆を挟み、18日にトレンチを埋戻して調査を終了した。（実働３日半）

平成11年１月に、再度、事業内容の確認を行ったところ、地権者からの要望（法面の除草等の管理ができない）と、事業後の石室管理の面（特に安全面）から、新たに盛土造成される田圃は、墳丘にすりつける計画に変更され、石室の開口部も塞がれることが明らかとなった。墳丘そのものが改変されるわけではないが、石室内への進入は当分の間不可能となることから、文化財課埋蔵文化財係で石室の測量調査を実施することとなった。また、石室内に水がたまる可能性があることや、ゆるんだ石材が落下するおそれなどがあることから、石室内を土のう等で充填し、その保存を図ることで、七尾農林総合事務所と合意に達した。



１号墳石室測量風景

石室の測量調査は、平成11年９月１日に着手し、９月22日に終了した。（実働６日間）

第３章　千野１号墳

第１節 墳　丘

上田三平氏による大正年間におこなわれた千野古墳群の現地調査は、以下に報告されているとおりである［上田1923］。当時は１号墳のみ確認している。

「徳田村字千野ハ飯川ノ東方山麓ニアリ、民家ノ附近階段状ノ田園ノ岸ニ圓墳アリ、封土ハ著シク削ラレタルガ如ク長サ約五間、幅約三間ニ過ギズ。其上ニ墓石及雑草生育ス、北東及東ハ高キ水田ニ接シ、西北ハ約六尺ノ低地トナリ水田ヲナス。石室ハ口ヲ西南ニ向ケ、玄室ト羨道ノ區別ナク、西南隅ノ側壁破壊セル結果此所ヨリ内部ニ侵入スルヲ得ベシ。奥壁ノ幅四尺七寸、側壁長サ十四尺、

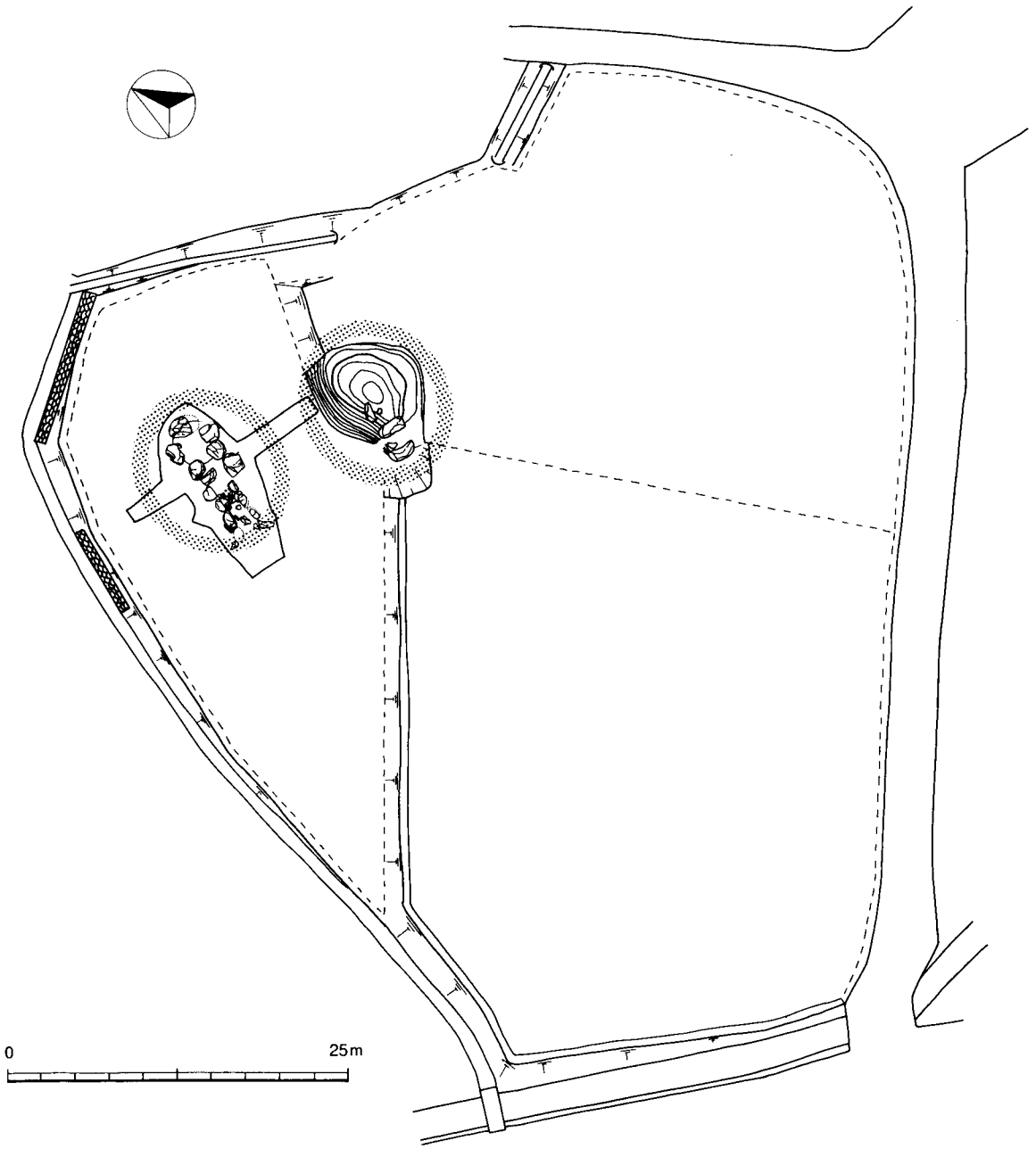


図３　千野古墳群全体図（1/500）

高サ二尺一寸、奥壁ニ接セル天井石ハ幅九尺五寸、入口ニ近ク更ニ一石アリ。遺物ハ何等傳フル所ナク、傳説ノ著シキモノナシ。」

七尾市史によると、市史編纂時の本古墳群は、上田氏の調査時と同じ状況であったことが記されている［七尾市S45］ほか、２号墳が隣接して存在したことも記されている。

現状では石室前面まで高く盛土造成が及んでいるが、市史の写真には、石室前面の盛土は見られず、第３図で示した山側の田の破線で示した所が田の境となっていることが分かる。すなわち、古墳のある位置が尾根筋にあたるものである。

墳丘は、現存する石室をちょうど覆うようにしてある。南北約10m、東西約８ｍを測るが、谷方向である西側以外は水田の造成によって既に埋め立てられているので、墳丘の基底部はよく分からない。高さ約３ｍを測るが、石室が１ｍ程度埋まっている可能性があること、および耕土下64cmで旧地表と思われる弥生時代終末期の遺物包含層が見られること、および天井石上に最大で50cm程度しか盛土が見られないことより、谷側からの墳丘の高さは４ｍ程度存在したものと推測される。平面的には、２号墳との位置関係から、および石室規模が２号墳と同じ程度とすると、直径15m程度の円墳と思われる。２号墳との間に設定したトレンチでは、周溝は全く見られなかった。山側には周溝がめぐり、石室入口（羨門）にいたるものと推測されるが、水田造成前の地形がよく分からないので、明確にしがたい。また、墳丘はすべて盛土によるものである。外護列石等の施設の有無は不明である。

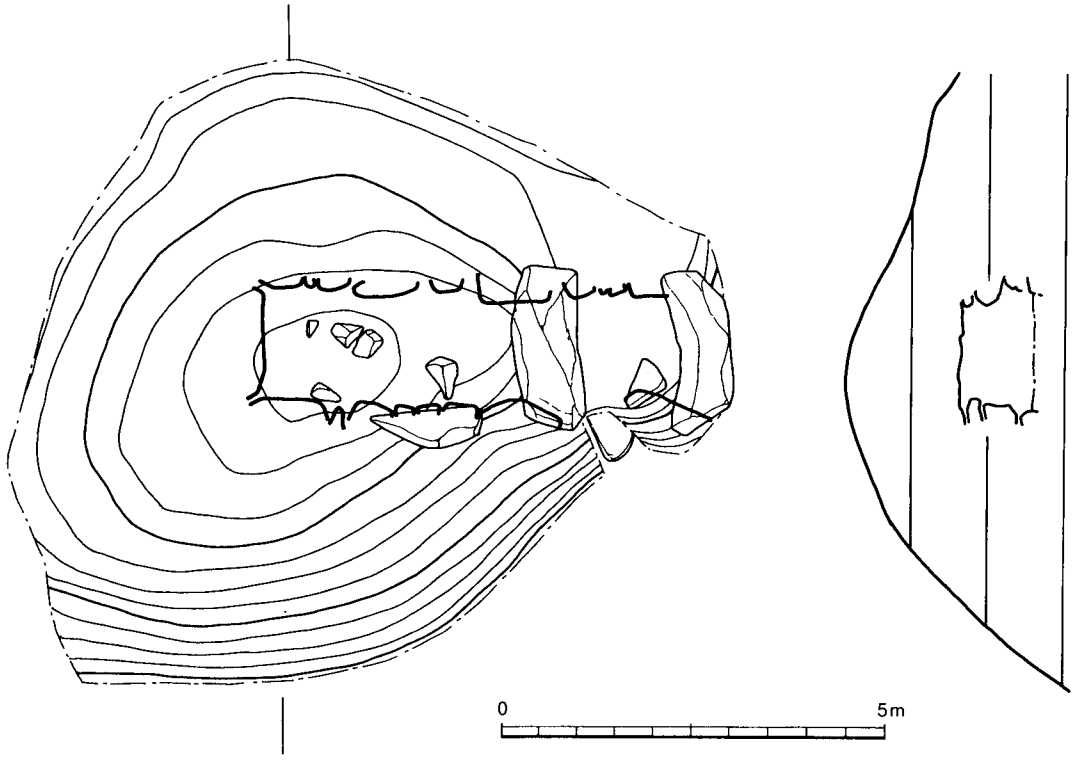


図４　千野１号墳墳丘図（1/100）

第２節　石　室

ほぼ南に開口する右片袖式横穴式石室である。現状の石室長5.42m、玄室長4.7m、玄室幅1.5～1.35m、羨道幅1.25mを測り、石室の主軸は、南から西に29度00分振った位置にある。石室の大部分が土砂に埋まり、現状の石室高1～1.1mを測る。石室高について、人が立てる程度の高さを想定すると、0.8～１m近くが埋まっていることになり、それを前提に記述する。石室の開口部分（羨門）は完全に埋まっており、天井石も２次的移動を被っている。なお、石室の左右は、奥壁から見た場合で区別している。本報告では右片袖式と考えたものの、無袖式の可能性もある。その場合、玄室と羨道の区別は、側壁の用材が小さくなることと天井石の大きさが変わるところで考えると奥壁から約４m付近になり、一段低くなる天井石で考えると奥壁から約4.7m付近になる。

用いられている石材は、付近で産する花崗岩を主体としているが、礫岩あるいは能登島で産する板状剝離する安山岩が使われている。特に安山岩の場合、全面に風化面を残す未加工状態で使用され、７世紀代に見られる板状剝離した石材とは異なる使用方法である。

奥壁は二段確認されている。仮に２段の石材で構成されたと考えると、下段は高さ150cm以上の石材を用いていることになる。３段であれは、80cm程度の石材となろう。両側壁が奥壁側に僅かながら組み込んでいる。下段の石材上方がカーブを描くために両側壁との間に僅かの空隙が生じ、人頭大の石材を詰め込んでいる。上段は下段の平坦面にあわせるように、奥壁幅よりもかなり小さい石材を置き、右側壁の間に石を補充している。天井石との間は、高さ調整のための石を入れているほか、右側壁隅天井石下の石材が奥壁と斜めに差し渡している。これは、力石のような目的で使われたものでなく、石材の大きさに規定された使われ方と思われる。

右側壁の袖部が破壊され、石室への出入口となっているので、玄門構造は全く分からない。現状で二段の石積みとなっているが、天井石との高さ調整のために小さな石材でさらに一段積んでいる部分もある。土中に埋まっている部分も考えると、四段程度の石積みと考えられる。石材は、小口積みにすることはなく、横位に置くことを基本としている。比較的大きさの揃った石を積み上げ、石材の空隙の大きなところは人頭大の石を用いている。拳大の石を間詰めしているが、圧力を受けずにぐらぐら動くものが多い。また、石材間の空隙が比較的目立つが、先の間詰めの石が抜け落ちたためであろうか。玄門部に接する側壁石材が、羨道側小口を揃えている。先の玄室を奥壁から４m付近までと考えると、ここに袖石があった可能性が考えられる。

左側壁も右側壁と同じような段構成となっているが、右側壁よりも大きめの石材が目立つ。石積みは、一段低くなっている天井石下面の高さにほぼ揃うように目地が通るようである。また、側壁石材と天井石との間に高さを調整する石材が少なく、天井石の形状に合わせるための補充石材が少しあるにすぎない。これらは右側壁には見られない特徴であり、左側壁を基にして構築されたものである。奥から３石目の小さくなった天井石付近より側壁用材が小型化しているようであり、天井石の加重に対応しているものであろう。

天井石は玄室３石羨道１石で構成されているが、羨道側にさらに天井石が存在したと思われる。奥側の１石は３m以上の巨石を用いている。奥から３石目と４石目が小型の石材で、しかも原位置を動いている。右側壁の部分的破壊によって、両天井石が石室入口方向にずれたようになっており、４石目と側壁との間に約10cmの隙間が生じている。羨道天井石下面も斜めになっており、入口方向にも動いていることが分かる。すなわち、奥から３石目が90度横に動いた状態である。

なお、２号墳と同等の石室規模と考えると、あと約３m側壁が伸びることになる。

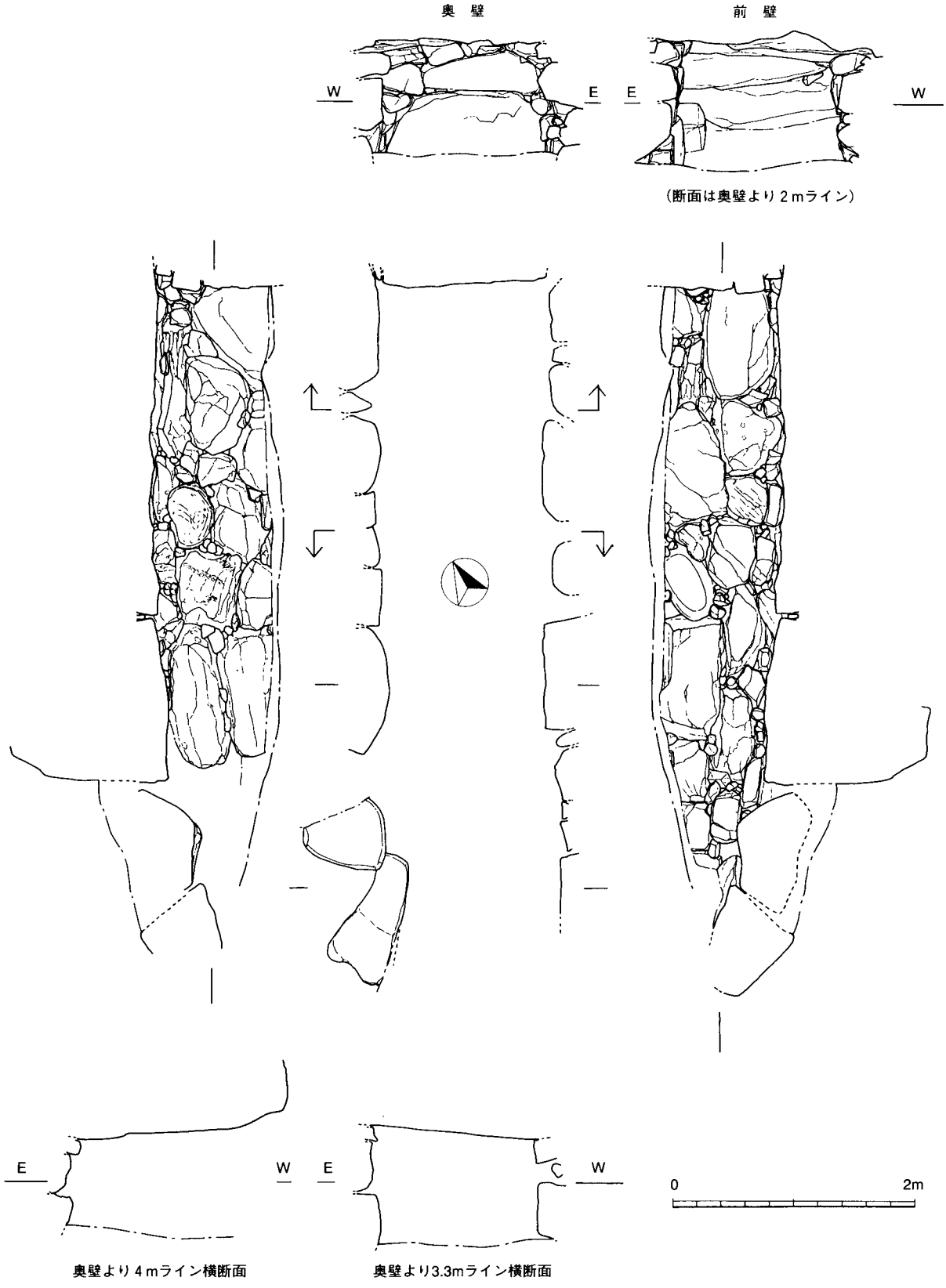


図５　千野１号墳石室測量図（1/50）

第４章　千野２号墳

１号墳の前面は、平成９年度事業により既に盛土され、試掘坑の設定は危険であると判断されたため、調査は主に１号墳北西側で実施することにした。１号墳の墳丘規模を確認するために設定したトレンチで、２号墳の石室に使用されたと見られる石材が検出され、２号墳の位置が確認された。この石室は盛土により保護されるが、その規模、構造、遺存状況等を把握するため、調査範囲を拡張し、遺存している石室全体の記録を取ることとした。

第１節　墳　丘

古墳が所在する付近は、通称セイゴロウヤシキと呼ばれ、以前は古墳が２基近接してあったとされている。大正10年頃に上田三平氏が付近を調査されているが、２号墳についての所見が見られないことから、削平はかなり早い時期になされていたと考えられる。破壊された石室については、その石材が近くの寺社で手水鉢として利用されたりしている。また、１号墳については、墳丘盛土が削り取られ、石室が露呈している状況が報告されているが、これは現在の状況とほとんど同じ状態であったと考えられる。

２号墳の墳丘規模を把握するために設定した、東西方向のトレンチのうち、石室から東側（１号墳側）は削平を受けており、墳丘裾を確定することはできなかった（第６図ｃ－ｄ断面）。これに対し、石室から西側については、石室主軸から西へ約５ｍの位置から落ち込み(周溝か？)がはじまり、僅かに墳丘裾の立ち上がりが確認できた（第６図ａ－ｂ断面）。これに、検出された石室の規模を勘案すると、２号墳の墳丘は、短径(東西)11～12ｍ、長径(南北)13～15ｍの円墳と推定され、１号墳との間隔は、２～３ｍであったと考えられる。

また、西側の墳丘基底が標高約50.0ｍであるのに対し、東側の削平面は標高約50.6ｍを測ることから、山側の方が墳丘裾が高く、自然地形の傾斜に沿って築造された古墳であったことが判明した。

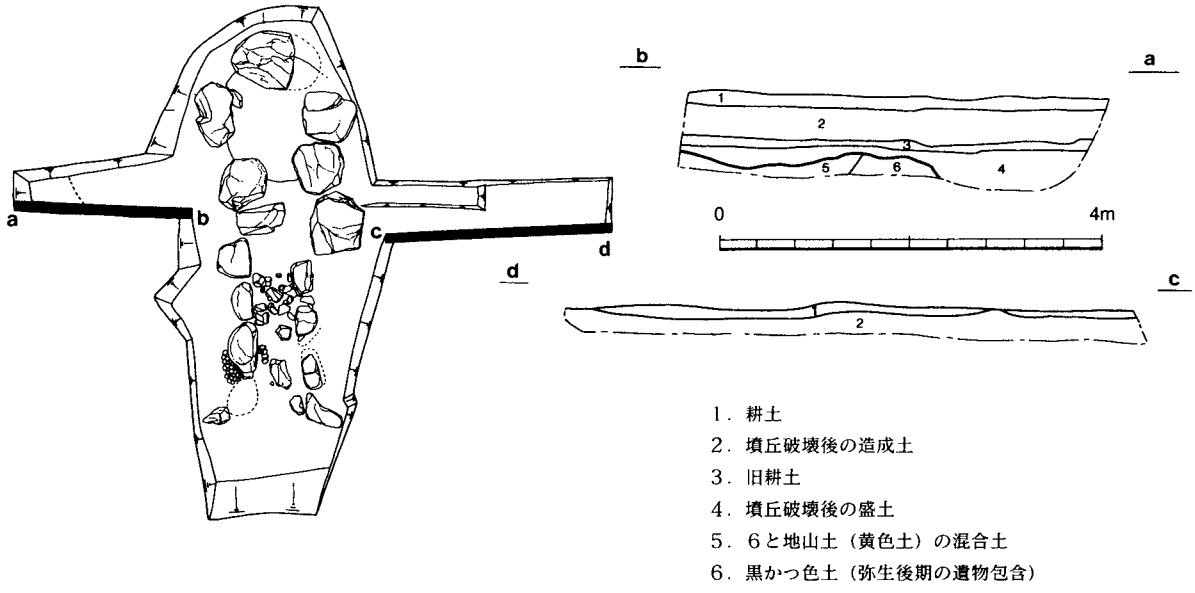


図６　千野２号墳全体図・土層図

第2節　石　室

２号墳の石室は１号墳の石室主軸とほぼ平行に検出された。墳丘は削平され、石室も最下段の石を残し上部は破壊されている。遺存している最下段の石も原位置を保っているものは少なく、倒れているものが多い。近年まで石室の石が田面に頭を出した状態で耕作が行われていたようであり、地権者の話によると、石を取り除こうとして掘り広げたが、大きすぎたため断念したことがあったとのことで、奥壁の石の周囲にその痕跡が確認された。また、その際、奥壁の石は東側の一部が割り取られたものと見られる。その後、恐らく農耕機械の導入により盛土・整地がなされたようである（第６図土層断面図第１・２層）。

石室は、主軸を緩斜面の傾斜方向に直交する形で構築されている。斜面をＬ字型に掘り下げ、石室を構築し、墳丘を盛土している。調査地周辺には、弥生時代末の遺跡が存在しているようで、墳丘・石室はその包含層を切り込んで構築されていることも新たに確認された。

検出された用材の大小と閉塞石の範囲から、玄室は奥壁から左側壁で３石目、右側壁で４石目までと考えられる。また、玄室の石材は全て倒れた状態であるが、羨道部に関してはほぼ原位置を保っているものと考えられる。これは、羨道部の基底石が横位の比較的安定した状態に据えられているのに対し、玄室部の基底石は立てて据えられていたためと見られる。現状の位置を基に基底石を起こした状態に復元すると、右側壁内側は羨道から玄室までほぼ直線となるのに対し、左側壁は玄室が羨道よりも30cm位は広くなるものと推定できることから、石室は、左片袖式横穴式石室と考えられるが、無袖式の可能性も否定できない。

石室の規模は、全長8.7m、玄室長4.5m、玄室幅1.3m、羨道幅１～1.2mと推定され、南方に開口する石室の主軸は、南から西に約24度振った位置にある。

羨道部は玄門から前庭に向かって若干開く形状で、玄門部付近で幅１m、前庭部付近で幅1.2mを測る。右側壁は現状で２石確認されたが、最も前庭側の１石が抜かれた痕跡があることから３石であったと見られる。左側壁は間隔が少し開いているが、４石確認できる。閉塞石は玄門から約1.5mの範囲に残存しているが、羨道部、玄室内ともに床面までの掘り下げをしていないため、閉塞の範囲は若干広がる可能性がある。

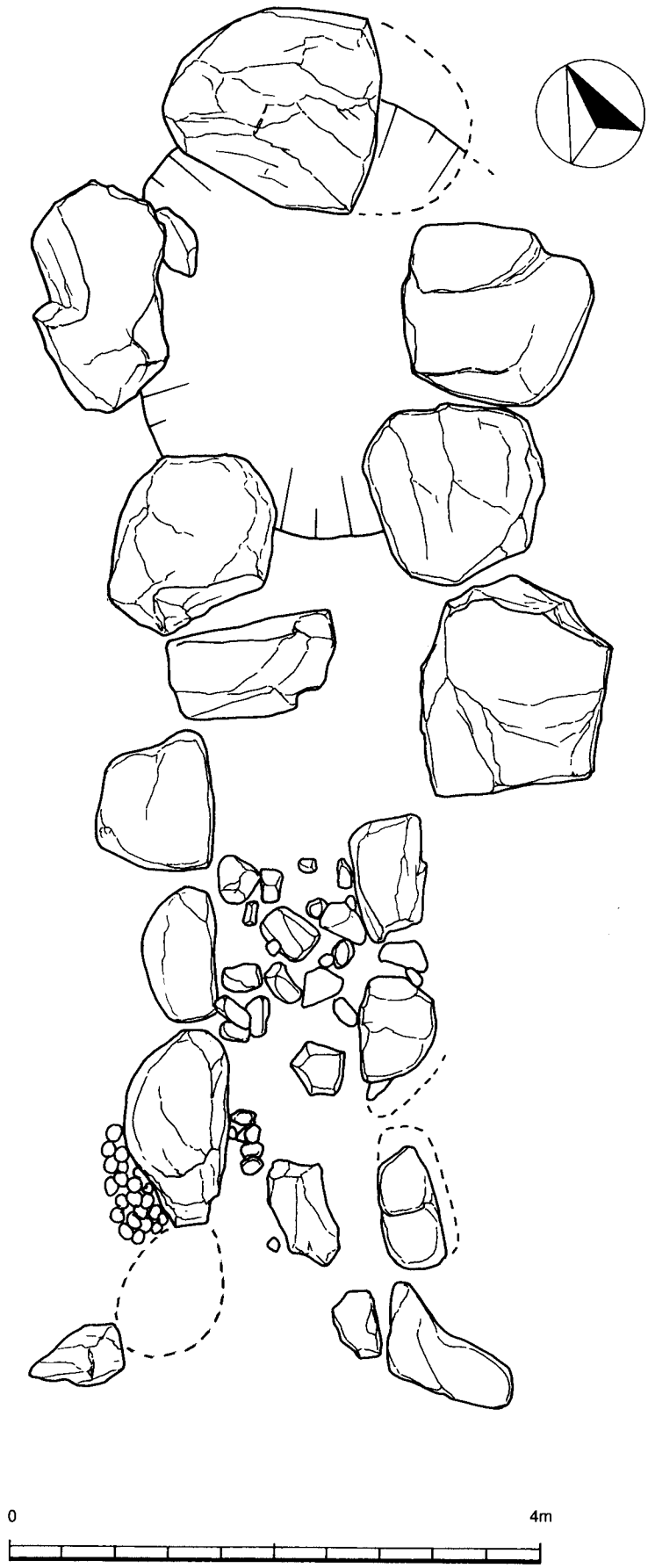


図7　千野２号墳全体図・土層図

第５章　まとめ

千野１・２号墳の築造年代を直接示す遺物の出土はない。千野１号墳は、一見無袖式のようだが、子細に観察した結果右片袖式と推定し、同２号墳も左片袖式と推定するにいたつた。これまでは、鹿島町徳前古墳群や鹿島町二宮古墳群、志賀町遍照岳古墳群などの狭長な石室に類似することから、無袖型式の横穴式石室と理解されていたようである［七尾市1970］。

伊与部倫夫氏は、北陸の横穴式石室の集成を行った［伊与部1989］。千野１号墳は伊与部氏の型式分類によると、無袖型石室で奥壁に鏡石、玄室と羨道を区別するための床面に置く框（かまち）石を用いる「無袖ⅡＡ型」の範疇に理解している。同型式には、徳前古墳群、二宮２号墳、遍照岳古墳群、富来町千浦二子塚古墳群、羽咋市オーショウジ２号墳、内浦町宮犬ゴショ山古墳、珠洲市大畠１号墳があげられており、伊与部氏の理解では、畿内地方の無袖式横穴式石室の影響により、７世紀前半に成立したとしている。

伊与部氏の型式分類の視点や区分の基準及び、実際の型式設定作業、たとえば上記古墳すべてが無袖ⅡＡ式と認定できるか等々、これからより深く検討を加えねばならないと考える。北陸全体の横穴式石室の基礎的な研究は伊与部氏が行っているにすぎず、これからの研究の深まりが望まれる。

１号墳に使われている石材のうち、板状に剝離する石英安山岩を割石ではなく原石の状態で使っていることに注目したい。割板石としての使用は、中期初頭に作られた羽咋市円山古墳の箱形石棺が確実な例だが、鹿西町雨の宮17号墳で割板石を用いた竪穴系の埋葬施設が時期的にさらに遡るようである。一方、横穴式石室にこの石材を使うのは、七尾市三室まどがけ２号墳（７世紀初頭）、羽咋市柴垣ごぜん塚古墳（７世紀前葉）など、７世紀前半の古墳に割板石として一部使われ、能登島町蝦夷穴古墳（７世紀中葉）や築造時期は不明ながら、中島町木の浦東谷古墳では割板石積みの横穴式石室がある。また、中島町ヤマンタン古墳群や机島の古墳群には、安山岩の石材を使用しているようで、前者が６世紀後半を中心に作られているとのことである［石川県1998］。

このような板状に剝離する安山岩は、その性質ゆえに古墳時代前半期に箱形石棺の構築材料として使われ、後半期の横穴式石室への利用は顕著ではなかったようである。蝦夷穴古墳や木の浦東谷古墳などは、安山岩を産する地域に位置するために積極的に使われたのであろうか。それでも７世紀中頃まで待たねばならない。埋葬施設による使われ方の相違によって、安山岩の割板石の使用が一時期途切れるようである。横穴式石室が本格的に導入されてから、七尾西湾を中心とする地域は近くで入手できる安山岩を原石の状態で石室に使うことが容易に想定される。このように、千野１号墳でみられた安山岩は横穴式石室に割石として使う前の段階の技術で作られたとして理解することができよう。

１・２号墳は近接して作られ、しかも開口方向がほぼ同じであるので、計画性をもって作られたものである。石室に限って特色を見てみたい。

石室規模等は、以下の通りである。

［１号墳］	全長	5.42（現存値）	［２号墳］	全長	8.7
	玄室長	4.7		玄室長	4.5
	玄室幅	1.35～1.5		玄室幅	1.3
	羨道幅	1.25		羨道幅	1～1.2
	主軸方位	N－29°0′－W		主軸方位	N－24°0′－W

２号墳は復元した石室から、１号墳は平面形および見上げ石の存在から、小さいながらも袖を持つことを想定した。玄室の長さが幅に対して非常に長いのが特色である。

２号墳は基底石のみ残され２段目以上の構造が分からないのに対し、１号墳は反対に石室上半の構造しか分からないので、二つの石室の直接的な比較はできない。しかし、両墳の計画的配置から相次いで作られたと考えられること、石室の規模がそれほど違わないことから、全く異なる技術で構築されたとは考えがたい。ちなみに奥壁で検討する。長さが1.5m近くあり、掘り方に立てるために一部分埋まったとしても石室空間に１m近くの高さであったと考えられる。玄室高を１号墳同様約1.6mと考えると、天井石までにもう１石必要となり、１号墳とよく似た石積みと理解できる。ただし、全体的な傾向として、１号墳の石材が２号墳よりも小さいものと考えられる。

２号墳の袖部は、羨道に使われたと同じ程度の石材を横置きとし、門柱石はないようである。１号墳も、袖部の構造が不明確であるが、現在開口した所に見られる石の状況から門柱石のような立石は想定できない。いずれも小さな袖であるために羨道壁体と一体となっているものと考え、１号墳にみられるような小さな天井石を２号墳にも想定できよう。

石室の開口部は２号墳では石を墳丘外に向けるように置いており、外護列石のように機能するのであろうか。能登の横穴式石室で外護列石が確認されたのは蝦夷穴古墳のみであり、注意しなければならない。閉塞石は角礫を用いている。

以上のような構造は、一般に畿内系といわれているものであるが、①狭長な石室であること、②袖石が小さくしかも横置きしていることより、複雑な要素が絡み合っているので、単純な図式で理解できない。しかも用いられている石材が多様で、能登地域の中でも石材供給の観点から本墳の占める位置を検討しなければならない。

本古墳群の築造時期を決めるのは至難であるが、少なくとも千野廃寺（遺跡）と密接な関連が想定され、それらの造営集団が同じであったと考えると千野廃寺（遺跡）造営以前の築造となる。千野廃寺の年代を木立雅朗氏は、その営造年代を遅くても国分廃寺の創建ごろ、一覧表では７世紀後半～８世紀はじめにかけてとしている［北陸古瓦1987］。したがって、７世紀中葉頃まで古墳の年代を下げることは論理上可能であるが、安山岩を原石で使っていることや袖をもつ石室構造等からそこまで下げることは困難であり、６世紀代でも後半で、７世紀を前後する頃に築造時期の下限を求めたい。

能登の横穴式石室について、６世紀前葉に畿内的要素の強い横穴式石室が導入されたが、後半には北部九州的要素の強い石室が主流となり、７世紀中頃に再び畿内色が強まった［伊藤1993］。このような流れの中で、本古墳群をどのように解釈できるかこれからの課題である。

参考文献

石川県教育委員会1998『中島ヤマンタン古墳群分布調査報告書』
伊藤雅文1993「横穴式石室の地域性―北陸地方―」『季刊考古学』第45号　雄山閣出版
伊与部倫夫1989「北陸地方の横穴式石室」『古文化談叢』第20集　九州古文化研究会
上田三平1923『石川県史跡名勝調査報告』第一輯　石川県
七尾市教委1986『千野高塚古墳』
七尾市1970『七尾市史　資料編第四巻』
七尾市教委1975『千野廃寺跡発掘調査報告』
北陸古瓦研究会1987『北陸の古代寺院』　桂書房

図　　版

図版1

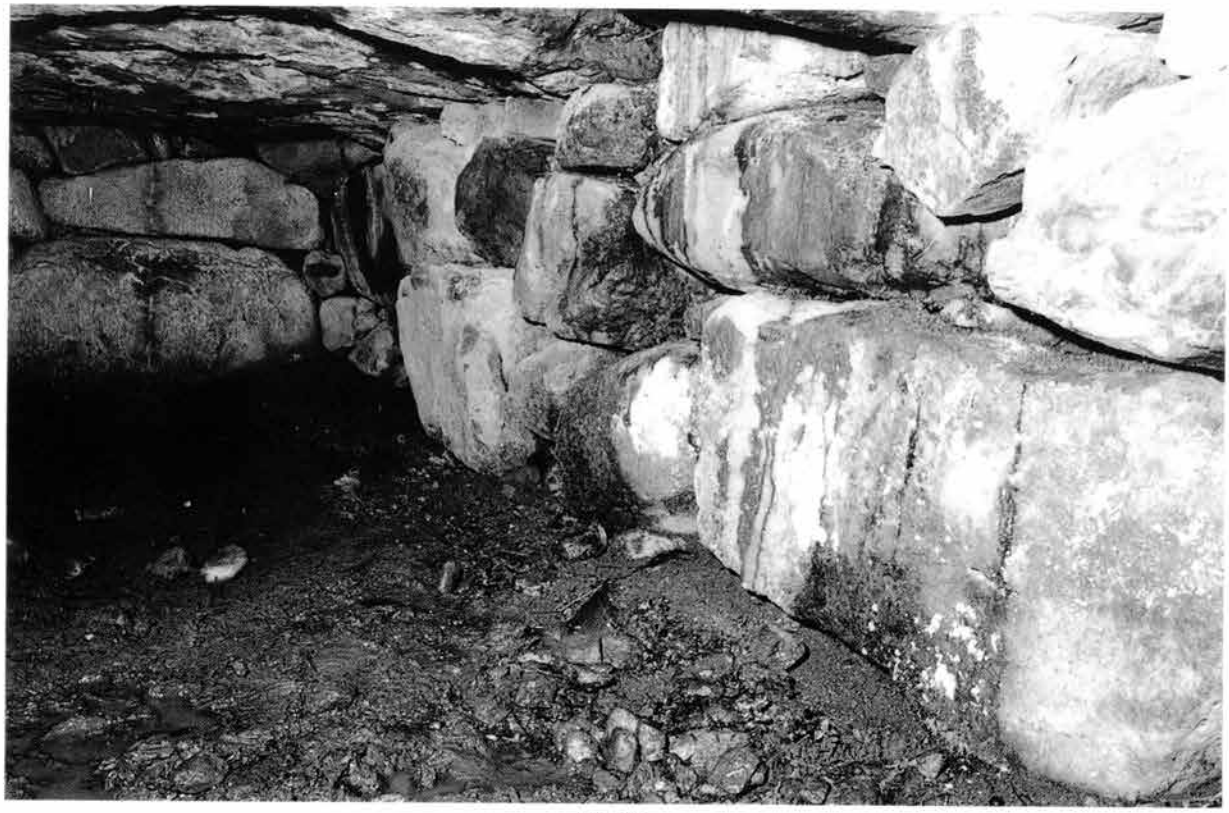
千野1号墳全景

羨門付近の開口部

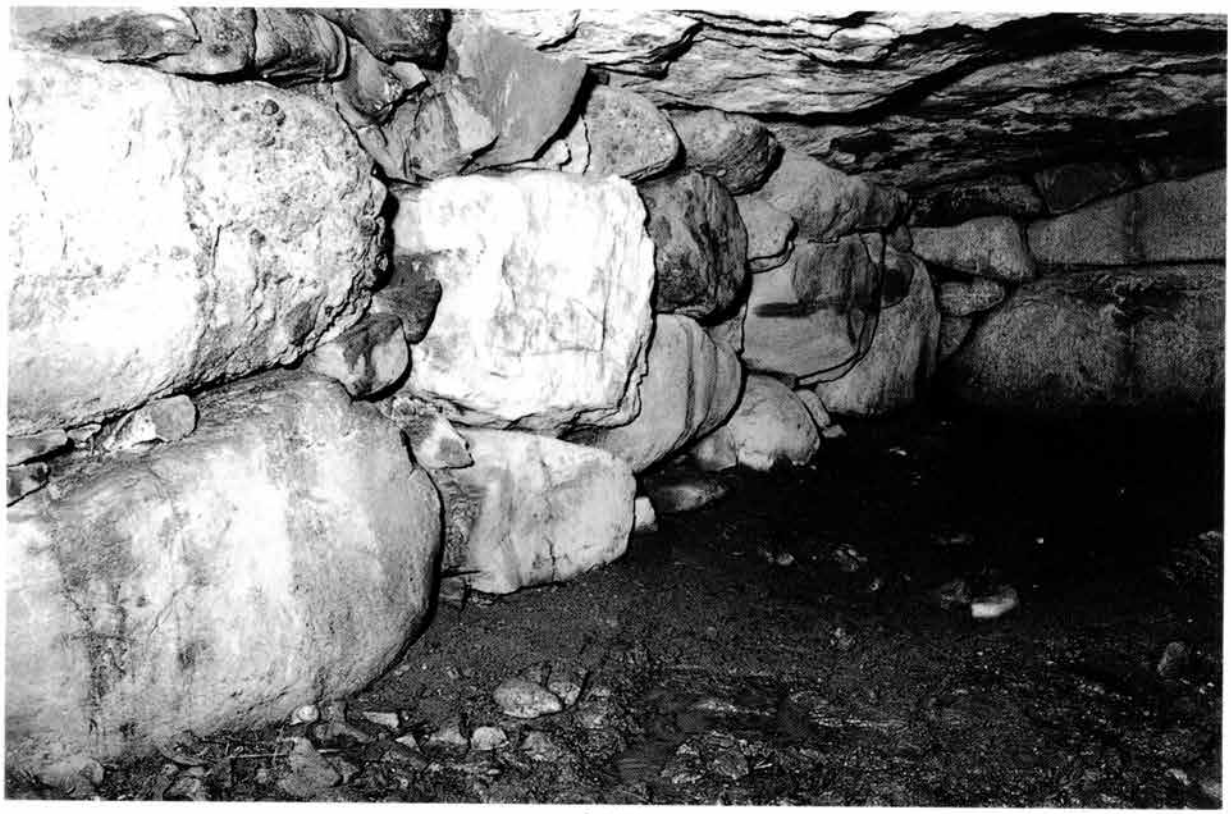
図版2

石室破壊状況

石室内現状

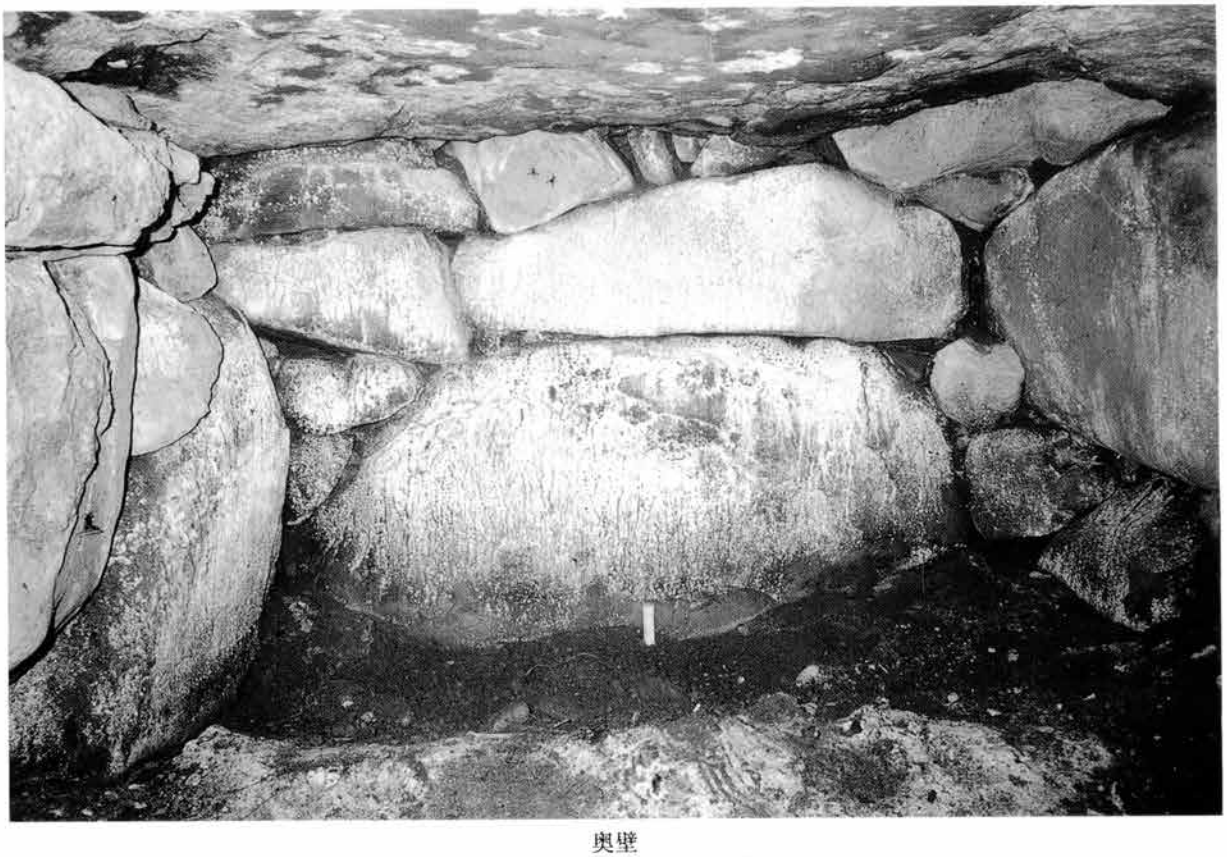


左側壁

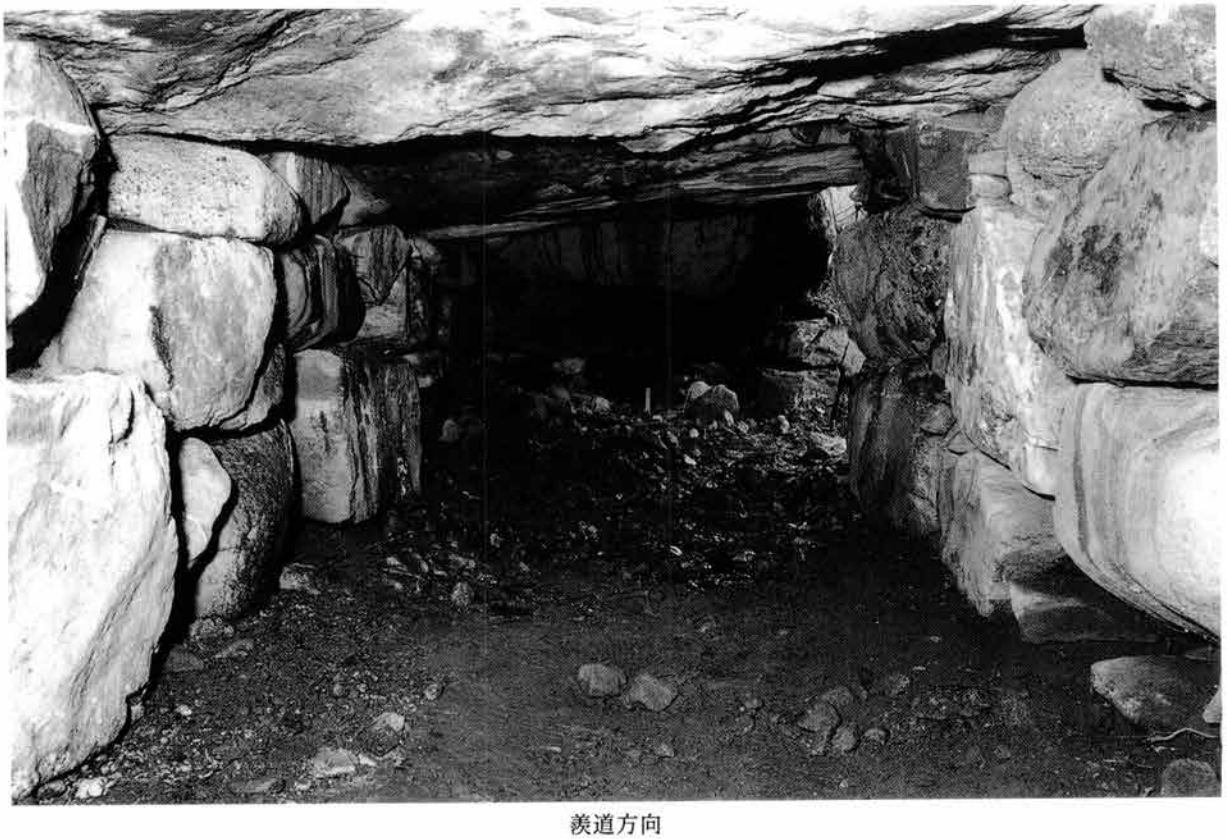


右側壁

図版4



奥壁



羨道方向

千野１号墳と２号墳（手前）

２号墳石室全景（奥壁より）

図版6

石室全景（羨道より）

玄室部分

閉塞石

羨道入口部分

図版8

2号墳調査風景

七尾市千野古墳群調査報告書

平成12年３月31日

編集・発行　石川県教育委員会
印刷・製本　北國書籍印刷株式会社